刺は葉と側枝の合体であり，葉はごく一部だけで，大部分は側枝から成っていると考えるのが妥当と思う。ただここでみたのは一つの器官の維管束を下から上にたどっただけで，個体発生を調べたわけではないので，上の様に言いきるには充分な証明とはいえないので今後さらに研究する必要があるが，少なくとも刺が葉の変形であるとはいえない。

ここに使った材料は神奈川県神武寺で採集したオオアリドオシ（ニセジュズネノキ *D. indicus* subsp. *major*）である。また熊沢氏の材料は図から判断して中京地方に多いホソバオオアリドオシ（ホソバニセジュズネノキ *D. indicus* subsp. *major* var. *lancifolius*）である。いずれにしてもアリドオシと同一種類であり，刺の基本的な性質は異ならない。

The spine of *Damnacanthus indicus* has been interpreted as a metamorphosed lateral branch. The spine of this species does not acompany the cover leaf. On this reason, Kumazawa (1979) asserted that the spine should be interpreted as a metamorphosis of the leaf. In this study it is concluded that the spine is transformed from the compound of the lateral branch and the cover leaf. It seems to be interpreted that the greater part of the spine is constituted by the lateral branch and the smaller part by the cover leaf being completely adhered to the base of the lateral branch.

（東京大学 理学部附属植物園）

□植生史研究会：**植生史研究**（**Japanese Journal of Historical Botany**）**第1号** 68 pp. 1986. 大阪. ¥2000. 植生史研究会の発足と同時に発行された機関誌である。日本における植生史研究の発展と普及をはかることを目的として，植生史研究のために紹介すべき資料や同研究のあり方などについて総説を中心に記事が組まれている。この第1号には「日本の第四紀植生史研究の諸問題（辻誠一郎）」他3編の総説，この研究会のシンポジウムの要旨1編，書評，関連学会の動向や国際情勢などの雑録が掲載され，この分野の情報誌としての将来が期待される。近年，花粉分析を中心としたこの分野の研究はめざましく，日本の第四紀の植生変遷と気候変動が水平及び垂直分布の観点から明らかにされてきた。このことは種の分布や分化などの問題が時空間軸を取り入れて扱えることを物語る。植生史研究は地質学，地理学，考古学，民族学など多領域へ影響を及ぼしつつある。しかし，一方では証拠標本の明記や整理，保存法の確立など，これからの課題も残されている。いずれにしても，本誌の発行によって植生史研究の新しい第1歩を踏み出したものとして，将来が期待される。同会の連絡先は大阪市立大学理学部生物学教室.

（松本　定）